悪途東遺跡

――市道原584号線道路新設改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書――

1988

群馬県安中市教育委員会
群馬県安中市建設部

序

安中市は群馬県の西部に位置し、碓氷川に沿って拓けた田園都市です。古くから交通の要衝として、また、養蚕地帯として栄えてまいりました。

なかでも原市地区は古墳が多く古代から人々が生業を営んでいたことがわかります。そして、その古墳も最近ではだいぶ数が少なくなってきました。祖先より受け継がれてきた古墳を少しでも残して、後生に伝えてゆくことは我々に課せられた使命でもあります。

今回調査を行なった悪途東遺跡はこうした事を踏まえて、事前に建設部と入念な打ち合せ、協議を行なった結果、市道の路線を変更し、古墳を回避することになりました。こうした試みは安中市でも初めてであり、安中市の文化財保護行政に新たな１ページを記すことで、その意義は大きいと思います。

今後とも文化財保護と地域開発の調整をうまく図り、かけがえのない文化財を将来に伝えてゆきたいと存じます。

最後に、路線変更に御尽力いただいた地権者をはじめとする関係者のご協力に感謝するとともに、発掘調査に従事した作業員の方々の労をねぎらいたいと思います。

昭和63年12月

安中市教育委員会

教育長　多　胡　純　策

例　　言

1　本書は安中市が行なう市道原584号線（旧悪途東線）道路新設改良事業に伴う、悪途東遺跡（略称Ｃ－２）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は安中市教育委員会が実施し、発掘期間は昭和63年７月４日～７月13日であり、遺物整理期間は昭和63年７月18日～９月９日であった。

4　調査は安中市教育委員会社会教育課大工原豊が担当し、松本豊がこれを補佐した。

5　本書執筆及び編集は大工原が行なった。

6　本遺跡の記録及び出土遺物は安中市教育委員会で保管している。

7　調査組織は次のとおりである。

建設部		教育委員会事務局			
建設部長	星野照夫	社会教育課長	茂木勝文	主事（社教主事）	田中秀雄
土木課長	矢野貞夫	社会教育係長	反町良一	主事	大工原豊（担当）
工務二係長	木暮純一	主査	松本　豊	調査員	千田茂雄
技師	角井富夫	主任（社教主事）	森泉寿義雄		

8　調査、遺物整理参加者は次のとおりである。

小川正子　金井武司　斎藤説成　酒井理恵　佐藤厚子　下マス江　神宮幸四郎　高木公太郎　田中利策　中川京子

9　報告書作成にあたり、次の方に御教示いただいた。厚くお礼申し上げます。（敬称略）

志村　哲

目　　次

序
例　言
目　次
Ⅰ　調査の方法と経過…… 1
Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境…… ~~2~~ 1
Ⅲ　層　序…… ~~5~~ 2
Ⅳ　遺構と遺物…… 5
Ⅴ　まとめ……10

Ⅰ　調査の方法と経過

路線センター杭№13とＥＣ＋8.7を結んだラインを基線（２ライン）とし、№13杭がＢ－２となるようにグリッドを設定した。また、１グリッドは４ｍ×４ｍで北西隅を基点とし、北から南へＡ、Ｂ、Ｃ、西から東へ１、２、３……と呼称することにした。

発掘作業はまず、バックホーによりⅣ～Ⅴ層上面まで掘削し、その後人力により遺構確認、精査を行なった。確認された遺構は精査を行い、測量、写真撮影を行なった。測量については遺構平面図、遺物分布図、土層断面図、コンタ図を作成した。また、Ｋ－１号墳及び周辺の古墳の現況測量を行なった。

遺物整理は遺物の水洗・注記→実測・拓本→トレース→写真撮影の順で行ない、並行して遺構図面の整理・素図作成、トレース、写真整理を行なった。

発掘調査は昭和63年７月４日から７月13日までの間行ない、遺物整理は７月18日から９月９日までの間実施した。調査期間中は雨天が多く作業が中断されることがしばしばあった。

Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境

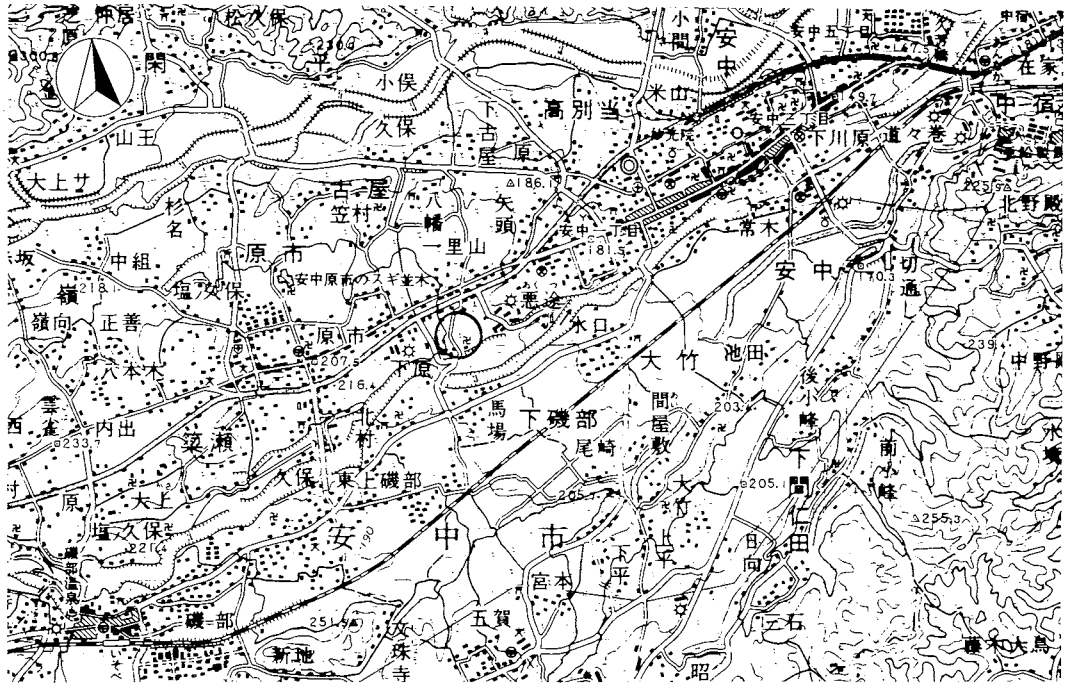
悪途東遺跡は安中市原市字悪途東490－６、492－６番地に所在する。原市地区は安中市の中・西部に位置し、碓氷川と九十九川に挟まれた碓氷川中位段丘上に位置する。悪途東遺跡はこの段丘の南端近くの碓氷川の崖線上に存在する。標高は約198mで、碓氷川の河床面との比高差は約35ｍをはかる（第１図）。また、地形を見ると南東方向へ緩やかに傾斜している。本遺跡は古墳群（悪途古墳群）の区域内にあたり、調査区は旧原市町17号墳（Ｋ－１号墳）の北辺部である。本遺跡の南東120mには観乗院がある。

この古墳群には５基の古墳が現存しているが、『上毛古墳綜覧』には４基しか掲載されていない。そのほかにも伝承、現況等で古墳が存在したと推定される箇所が２箇所存在しており、かつては少なくとも７基の古墳が存在していたとみられる（第２図）。『上毛古墳綜覧』で確認できるのはＫ－１号墳→旧原市町17号墳、Ｋ－２号墳→同18号墳、Ｋ－３号墳→同16号墳、Ｋ－４号墳→同15号墳であり、Ｋ－５号墳は記載がない。これらの古墳の現況はすべて山林であり、Ｋ－４、５号墳は遺存状態は比較的良好であるが、Ｋ－１、２、３号墳はあまり良くない。また、『上毛古墳綜覧』によると、Ｋ－１、５号墳は「石槨開口ス」とあり、すでに石室が開口していたことがわかる。

この周辺では、本遺跡の東約400m、字天王西に３基の古墳（旧原市町19、20、21号墳）があったことが『上毛古墳綜覧』に記載されているが、すでに削平されて現存しない。また、本遺跡の西約500m、字芝原東865―２に１基（綜覧に記載なし）、同西約800m、字芝原東994―２に１基（旧原市町14号墳：大砂山）現存している。このように、碓氷川北岸の崖線上には古墳が多数存在する。また、本遺跡の北東部分には縄文時代前期から中期にかけての遺物が散布しており、この時代の遺跡があったことが推定される。

Ⅲ　層　　位

本遺跡では古墳の周溝や近世の溝、現代の攪乱により、自然堆積の状態の部分が少ない。そのため、基本層序が明瞭に観察される部分は限られている。復元的に基本層序について述べると次のとおりである（第６図）。



第１図　悪途東遺跡位置図(1：50,000)

Ⅰａ層　暗灰色土層　　Ａｓ－Ａを多量混入する。現表土層。

Ⅰｂ層　灰白色軽石層　浅間Ａ軽石（Ａｓ－Ａ：1783年）純層。

Ⅱａ層　暗褐色土層　　Ａｓ－Ｂを多量混入する。

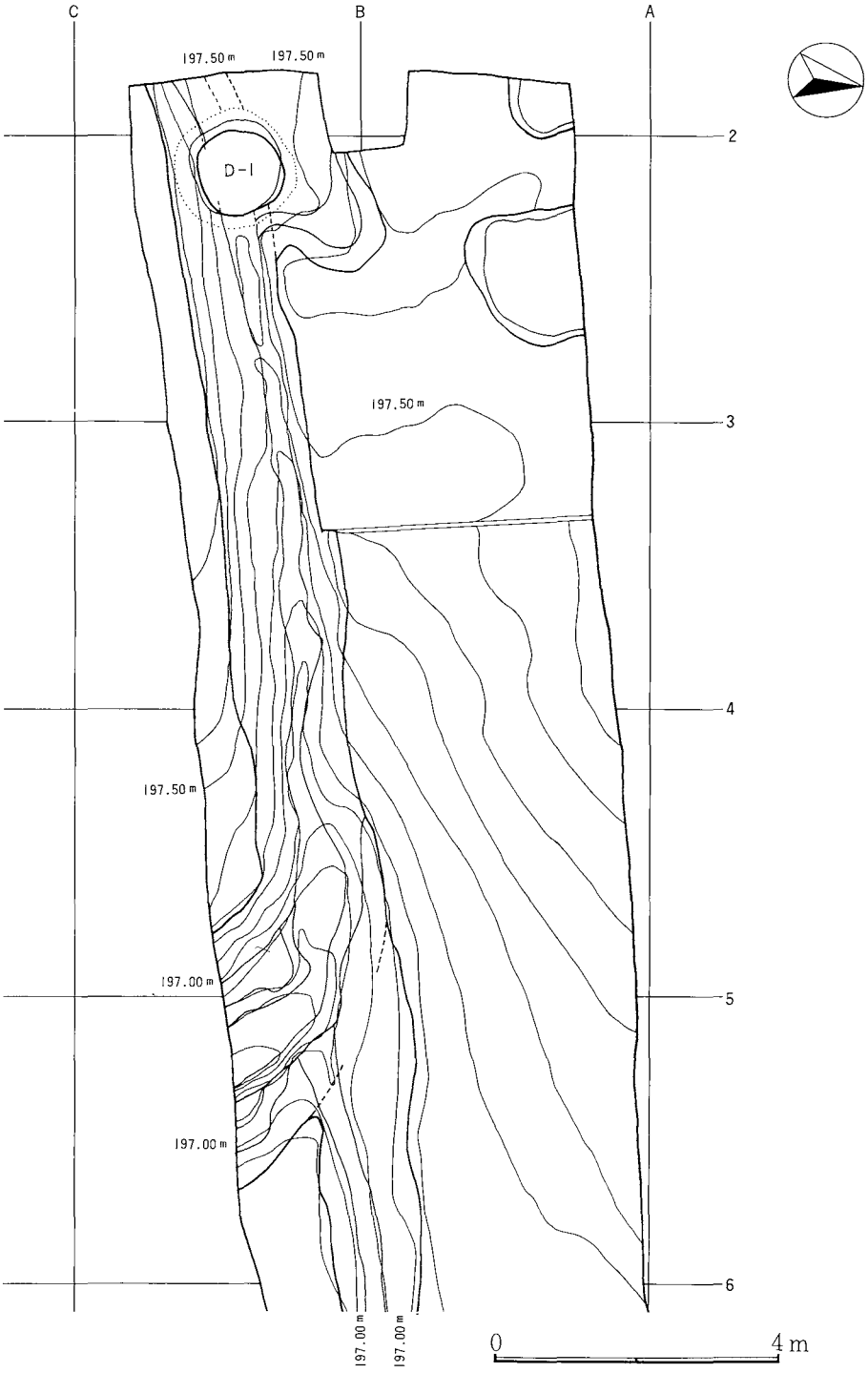
Ⅱａ'層　褐色土層　　Ａｓ－Ｂを大量混入する。

Ⅱｂ層　灰褐色軽石層　浅間Ａ軽石層（Ａｓ－Ｂ：1108年）純層。

Ⅲ層　　黒褐色土層　　Ａｓ－Ｂをまったく混入しない。

Ⅳ層　　褐色土層　　古墳墳丘の地山。この層の上面が遺構確認面。

第２図　悪途東遺跡と周辺の古墳



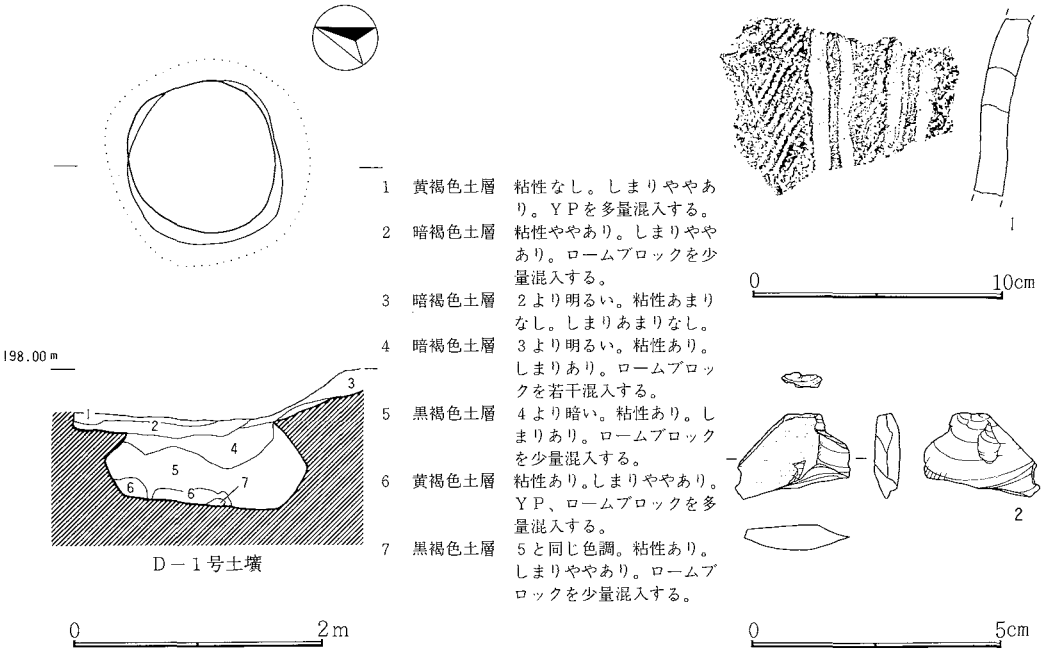
第３図　悪途東遺跡調査区全体図

Ⅳ　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

遺構　縄文時代の遺構では、土壙（D－1号土壙）1基が検出された。この土壙はB－2グリッドに位置する。K－1号墳の周溝の底面において確認された。円形を呈する袋状土壙であり、直径1.2m、最大径1.6m、確認面からの深さ0.7mである。K－1号墳の周溝との間に切り合関係が認められ、土層断面を観察すると、D－1号土壙の覆土との間に不連続面が存在する。
したがって、K－1号墳より古いことがわかる。遺物はまったく検出されなかったが、覆土と切り合関係からみて縄文時代のものであると考えられる。

遺物　縄文時代の遺物は少量検出された。1は中期後半加曽利E式の深鉢形土器の胴部破片である。地文は単節RLの縄文で、太い沈線を2条ずつ縦位に施文し、その間を磨消している。2は石材A類の剝片である。黒曜石製で、表面に古い剝離面を大きく残している。二次的な剝離は認められない。



第4図　縄文時代の遺構・遺物実測図

2　古墳時代の遺構と遺物

(1)　K－1号墳と周辺の古墳について（第5図）

K－1号墳は『上毛古墳綜覧』には「旧原市町第17号墳」とあり、規模は「大サ径36尺、高サ10尺」と記載されている。そして、「石槨開口ス」とある。これによると、直径10.9m、高さ3mとなるが、現況では一辺16mの方形で高さは2.5mであり、当時の記載が正確なものではなかったことがわかる。また、石室は横穴式石室であったとみられるが、現在は開口しておらず、羨道部分が崩落したとみられる陥没部分が存在する。

K－2号墳は旧18号墳であるが、市道により、西側⅓程を切られている。形態は円墳か方墳かはっきりしない。現況では直径12m、高さ1.2mである。

K－3号墳は方墳の可能性が強く、現況では一辺12m、高さ1.6mである。玄室部分が陥没している。

(2)　検出された遺構（第6図）

古墳時代の遺構としては古墳（K－1号墳）の北側の周溝一辺が検出された。この周溝は東西に直線状にのび、北東及び北西部分で急に曲がっている。断面形は緩やかなU字状を呈している。一辺のみの調査なのではっきりしないが墳丘の現況をみてもやや方形であることから、本来は方墳であったと推定される。。周溝の規模は上幅1.4～1.6m、深さ0.4～0.9mである。最も広い部分及び最深部分は北東のコーナー部分である。

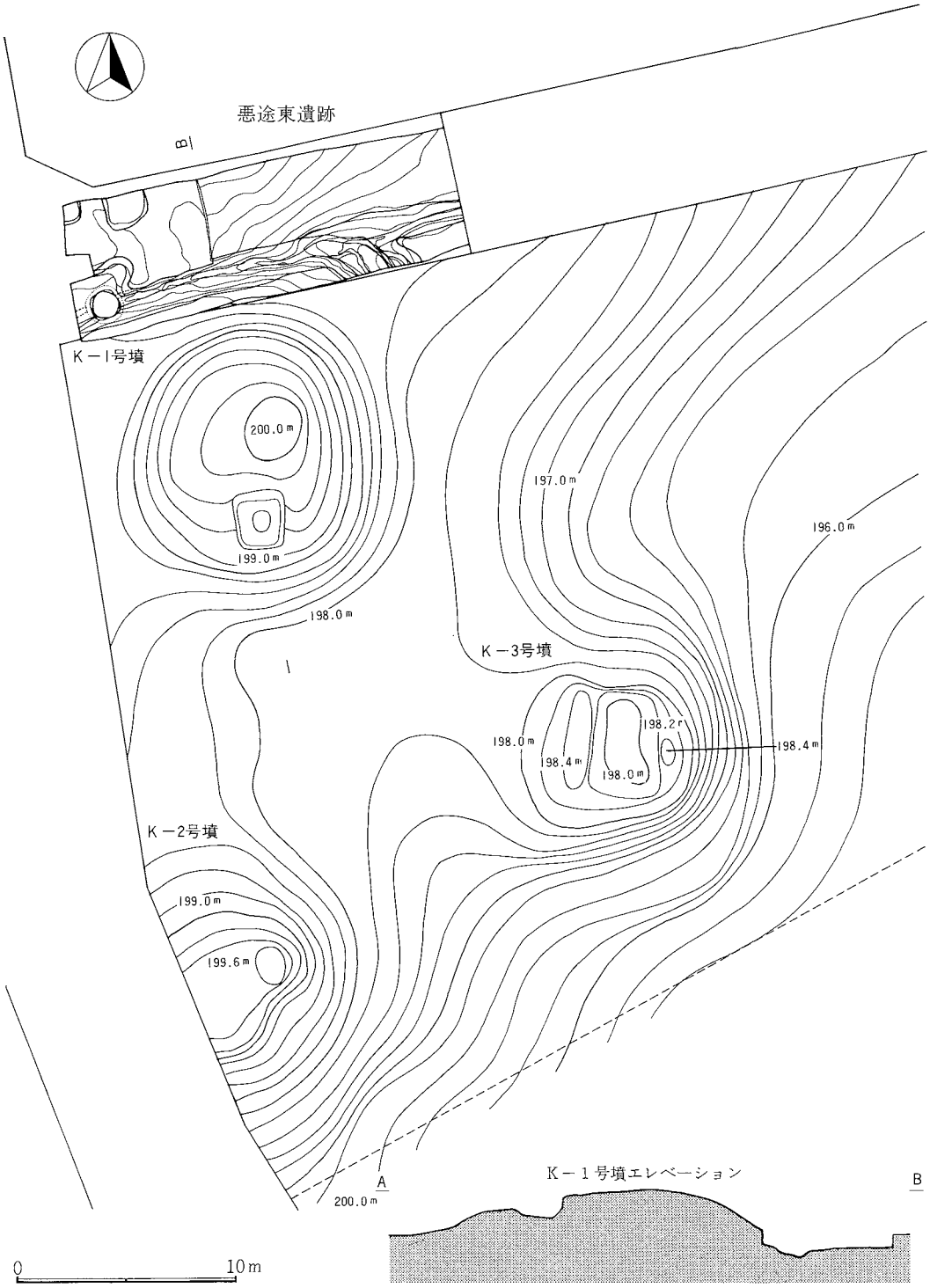
覆土の堆積状況を観察するとIIb層（As－B）はほぼ水平に堆積しており、平安時代後期にはすでに周溝は埋没していたとみられる。また、IIb層を挟んで上下から多数の円礫が検出された。特に、北東のコーナーには集中していた。この中には若干の遺物も含まれていた。これらの円礫は葺石か石室の用材と考えられ、この段階に古墳が一部破壊されたものと推定される。

また、As－Aを大量混入する溝がこの周溝に沿って存在しており、江戸時代以降にもこの周溝が攪乱を受けたことがわかる。

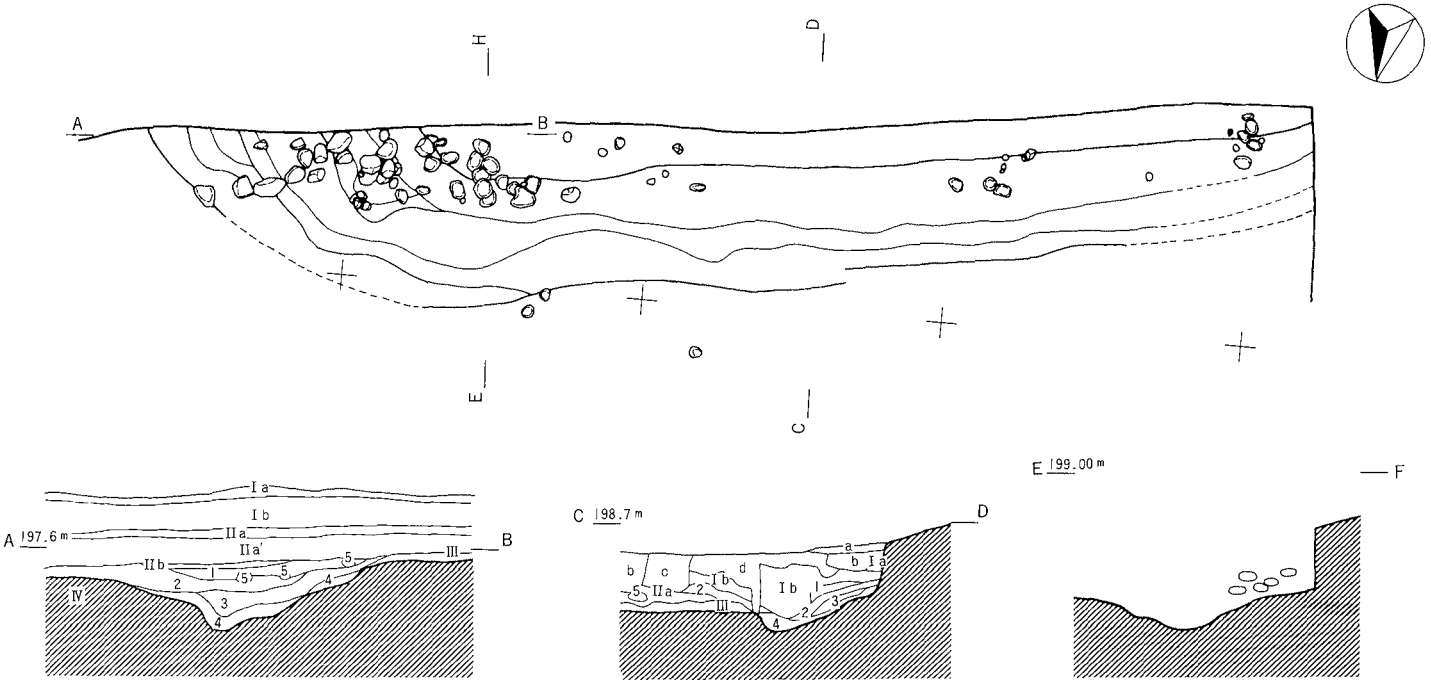
(3)　検出された遺物（第7図）

古墳時代の遺物は先にも述べたとおり、IIb層を挟んで上下から検出された。これらの遺物は本来この位置にあったものではなく、二次的にこの位置へ移動したものである。

個々の遺物の特徴は第1表のとおりである。



第5図　古墳群実測図(1：300)



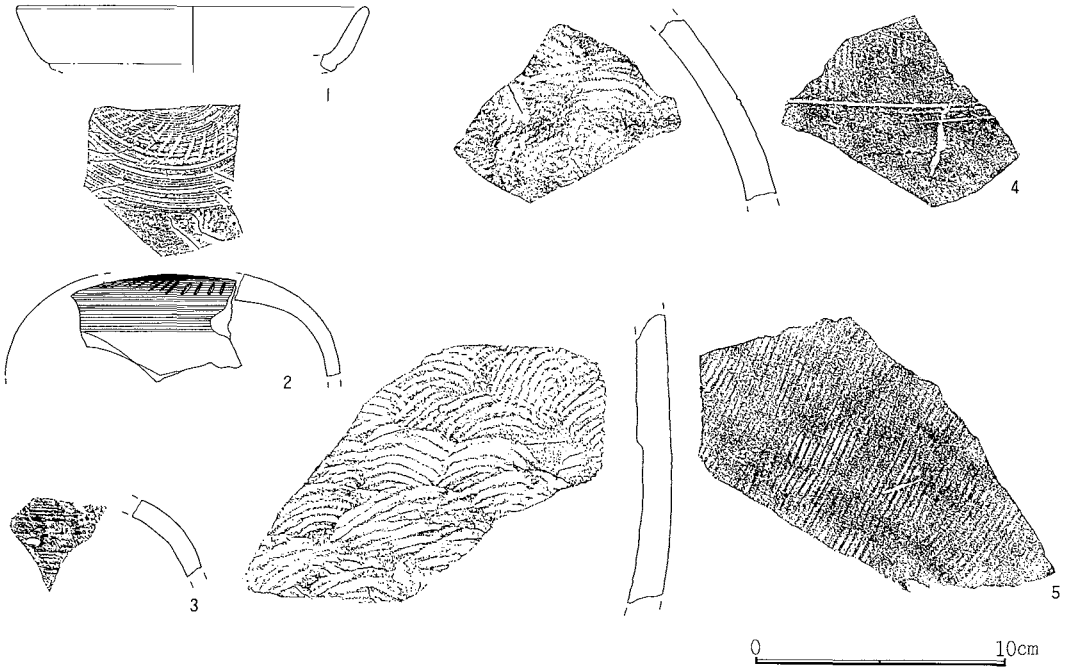
	色調	粘性	しまり	混入物等
Ⅰa	暗灰褐色土層	なし	なし	As－A多量
Ⅰb	灰白色軽石層	なし	なし	As－A純層
Ⅱa	暗褐色土層	なし	ややあり	As－B多量
Ⅱa'	褐色土層	なし	なし	As－B大量
Ⅱb	灰褐色軽石層	なし	なし	As－B純層
Ⅲ	黒褐色土層	ややあり	ややあり	
1	黒色土層	ややあり	あり	
2	黒褐色土層　1より明るい	ややあり	あり	ローム若干、Ⅲ層に類似
3	黒褐色土層　2より暗い	ややあり	あり	ローム若干
4	暗黄褐色土層 3より明るい	あり	あり	ロームブロック多量

	色調	粘性	しまり	混入物等
1	暗褐色土層	なし	あり	
2	暗褐色土層　1より明るい	ややあり	ややあり	
3	黒褐色土層　2より暗い	ややあり	ややあり	As－B？
4	暗黄褐色土層　3より明るい	あまりない	あまりない	ロームブロック少量

a～d　水道管、ゴミ穴等の攪乱層

0　4m

第6図　K－1号墳周溝実測図



第７図　古墳時代の遺物実測図

No.	器種	法量	調整技法	胎土	色調	残存	備考
1	土師器 坏	器高(2.6) 口径(14.0)	外面：口辺部横ナデ、底部へラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を 少量含む	赤褐色	口辺部～底部1/10	
2	須恵器 提瓶	胴部径 (13.4)	外面：胴上部回転カキ目の後、櫛描刺突 内面：回転横ナデ	堅緻	青灰色	胴上部1/6	自然釉
3	〃		外面：胴上部回転カキ目 内面：回転横ナデ	堅緻	青灰色	胴上部1/10	
4	須恵器 甕		外面：胴部回転横ナデ 内面：胴部同心円状のタタキ目	細砂粒を 少量含む	灰褐色 赤褐色	胴部一部	
5	〃		外面：胴部タタキ目を半スリケシしている。内面：胴部同心円状のタタキ目	緻密	灰色 灰褐色	胴部一部	

第１表　古墳時代の遺物観察表

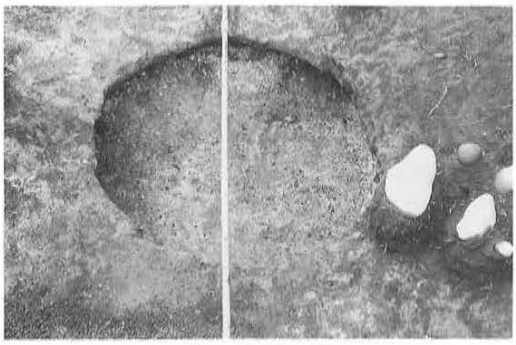
V　成果と問題点

悪途東遺跡の調査の意義は、まず第一に古墳を回避するために市道が路線を変更し、古墳への影響が最小限に食い止められたことにある。今回の場合、事前に市土木課と教育委員会との間で古墳を破壊しないようにするための協議が重ねられたことにより、古墳を保護することができた。これは発掘調査を行なって記録にとどめることより重要なことである。

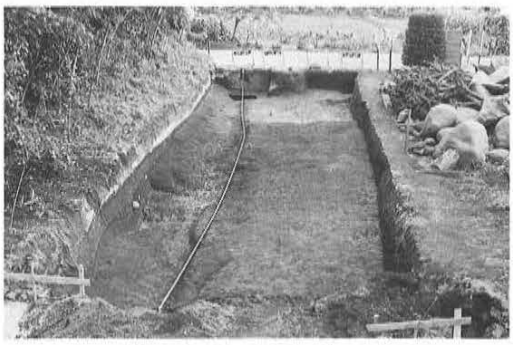
また、今回の調査によって明らかとなったこととしては次のことがあげられる。K－1号墳は円墳ではなく、方墳であった可能性が高いことが判明した。そして、検出された遺物から、古墳時代終末期（7世紀後半～8世紀）に築造されたものである可能性が高いことも明かとなった。しかし、石室構造等は今回の調査では明かではない。さらに、周辺の古墳との関係も今のところ不明であり、今後とも留意する必要がある。

悪途東遺跡遠景（南より）

悪途東遺跡近景（北より）
雑木林がK－1号墳



D－1号土壙

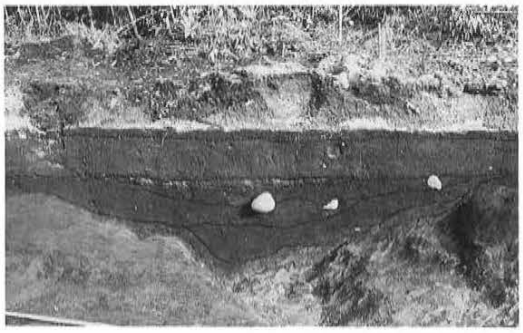


悪途東遺跡全景（東より）
K－1号墳北側周溝

K－1号墳周溝礫、遺物出土状況
（北より）

K－1号墳周溝礫、遺物出土状況

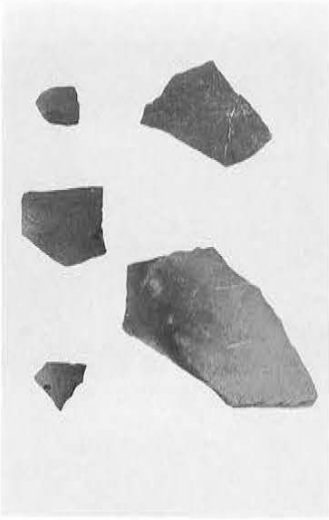
図版－2



K－1号墳周溝北東隅土層断面

K－1号墳周溝土層断面

縄文時代の遺物



古墳時代の遺物

悪 途 東 遺 跡

— 市道原584号線道路新設改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行日　昭和63年12月28日
編　集　安中市教育委員会
発　行　安中市建設部
印　刷　朝日印刷工業株式会社